図 1

八木一夫と清水九兵衛　陶芸と彫刻のあいだで

2017年9月16日[土]～ 12月3日[日]

菊池寛実記念 智美術館
〒105-0001 東京都港区虎ノ門 4-1-35　西久保ビル B１F
TEL03-5733-5131　FAX03-5733-5132　http://www.musee-tomo.or.jp

プレスプレビューのご案内は９頁をご覧ください。

第二次世界大戦の敗戦からの復興期に製陶を生業とする京都の東山に新しい陶芸を試みる青年たちがいました。本展で紹介するのは、それぞれの立場から陶芸界に新風を送り込んだ八木一夫（1918-1979）と清水九兵衛（旧姓塚本廣、後に清水洋、裕詞、七代六兵衛　1922-2006）です。

八木一夫は、鈴木治、山田光ら陶芸家の仲間たちと1948年に結成した走泥社の中心的存在であり、用途を持たない彫刻的な作品を“オブジェ焼き”と称して制作し、その表現としての可能性を追求しました。陶芸家八木一艸の長男として京焼の本場といえる五条坂界隈に生まれ育った八木の造形の妙味は、茶の湯をはじめ使い手の美意識に育まれた日本のやきもの文化や、製陶業の現実を精神の背景に持ちながら、西洋近代美術の考えを取り入れて、自身の思想や心象を表現したところにあります。

一方、名古屋に生まれ名古屋高等工業学校で建築を学んだ清水九兵衛は、東京藝術大学工芸科鋳金部に在籍していた1951年に、ガラス、家具デザイン、染織、漆工の分野で活動する佐々文夫、松村勝男、巽勇、中村富栄と新工芸協会を結成し、最新のモダンリビングに似合うインテリアや器物を提案する展覧会を東京、銀座で行うかたわら、江戸時代から続く陶家、清水六兵衛家の養嗣子となり陶芸の道に入りました。デザインの感覚を生かした端正な造形は日展でも受賞を重ね、ホープとして期待されていたことが窺われます。

陶芸と彫刻のあいだに新たな表現領域を見出した二人の挑戦は、それぞれの背景の違いから、実用と表現、土とフォルムへの取り組み方が異なりますが、その振り幅は現代陶芸の多様な表現との繋がりを感じさせます。本展での紹介は彼らの幅広い表現活動の一端ではありますが、その自由な取り組みと活力に満ちた創意をご覧いただきたく思います。

つきましては、この展覧会を多くの皆様にお知らせいただき、周知にご協力を賜りますよう謹んでお願い申し上げます。

■■展覧会概要■■

〇展覧会名	**「八木一夫と清水九兵衛　陶芸と彫刻のあいだで」展**
〇会期	**2017年9月16日(土)～ 12月3日(日)**
〇観覧料	**一般1,000円／大学生800円／小中高生500円**
〇主催	公益財団法人菊池美術財団、日本経済新聞社
〇助成	公益財団法人花王 芸術・科学財団
〇会場	菊池寛実記念 智美術館
〇開館時間	午前11時から午後6時まで（入館は午後5時30分まで）
〇休館日	月曜日（9月18日、10月9日は開館）、9月19日（火）、10月10日（火）
〇展示内容	八木一夫の作品およそ60点（陶芸、ガラス、ブロンズ、版画他） 清水九兵衛の作品およそ60点（陶芸、真鍮彫刻、アルミニウム彫刻他） ＊会期中展示替えを行います。

展覧会に関するお問い合わせ　担当：花里・島崎（☎03-5733-5131/FAX03-5733-5132）

■■現代陶芸のルーツを振り返る■■

日本の陶芸の展開は、世界の他の地域と比べてユニークです。また、現代陶芸の多様な造形には高い関心が寄せられています。本展では今後を展望するためにもそのルーツの一つを振り返りたいと思います。

現代陶芸の多様な造形の直接のルーツはやはり戦後にあります。1950 年代は、戦前の体制や美意識に対して新しい時代に合うものが求められ、自身の現実を表現したいという思いが新しい表現を生み出し、より良い生活への希求がデザインへの意識を高めました。陶芸におけるオブジェはそんななかで作り出され、それを牽引したのが走泥社です。

1948 年の走泥社発足時の趣意書は以下のようなものでした。

「戦後の美術界は、自己の混乱から脱出するために、結社と云う便法を必要としたが、漸く今日、その暫定的役割は終了したかに見える。虚構の森を蹴翔つ早晨の鳥は、も早、真実の泉にしか自己の相貌を見出さぬであろう。我々の結合帯は“夢見る温床”ではなく、まさに白日の下の生活それ自体なのだ。(以下略)」

八木一夫は、陶芸に新たな可能性を見出そうとした走泥社の中心的存在であり、一方、彼らとは異なる取り組み方で、いわば新たな眼で陶芸に取り組んだ一人に清水九兵衛がいました。

（図２）八木一夫「ザムザ氏の散歩」1954 年

◆それぞれの新しさ

1960 年 6 月 21 日付の京都新聞紙上で〈工芸作家素描〉というシリーズが始まり、その 1 回目で八木一夫と清水洋（後の九兵衛）の造形の新しさが紹介されました。八木一夫については、焼き物のよさを心得つつ、立体造形としての発展の可能性を見出そうとしているとされ、清水洋については、陶芸を始める前に東京芸術大学で鋳金を学んで養ったフォルムの追及に重点があり、それによって陶芸の本質的発展をめざしているというものでした。

（図３）清水九兵衛（洋）「花器（オブジェ、目、方容）」1955 年、東京国立近代美術館蔵

この連載は、京都工芸美術展に出品した作家を紹介する企画であり、当時、八木は 42 歳、清水は 38 歳でした。陶芸家として作品を発表するようになってから 10 年前後が経ち、二人とも京都や関西にとどまらない目覚ましい活躍を見せていました。

一方、二人の違いを八木自身が同年 9 月 2 日付の朝日新聞のシリーズ〈前衛を探る〉の 5 回目で、「清水洋」を紹介しながら触れています。八木の文才は当時から認められていたようで、新聞や雑誌などに度々寄稿の機会を得ています。

八木のエッセーは、五条坂のご近所さんでもある清水を独特な言い回しで「適正速度でスクーターに乗る彼」と表現して始まり

（図４）八木一夫「碑、妃」2015 年
京都国立近代美術館蔵

（図５）清水九兵衛（洋）「花器」1955 年
東京国立近代美術館蔵

ます。自身が「茶わんやのせがれ」であるのに対し、清水を「進歩的なクラフトマン」と呼び、その作品は清潔、端正であり、際立つ新鮮みが、いわゆる六兵衛風の作風からの断層を感じさせるほどだとしています。それが不安材料でもあり、しかしながら全く新しい京焼きの展開を予想させ、おもたくふるい日本の陶芸界にふきぬける貴重な新風であるとしています。

余談ですが、それから９年後、八木は『八木一夫作品集』（求龍堂）を出版し、そこに掲載したエッセーのなかで自身を「工芸とも美術ともつかぬ鵺」と表現しています。純然たる工芸として器を作るのではなく、心情や思想を陶芸で表現しようと独自の道を手探りで進む境地の不確定さを「鵺」になぞらえたと思われます。

◆挑戦的、実験的な二人の作品

作品からも二人の取り組み方の違いははっきりと分かります。

陶芸における彫刻的な作品は、当時、八木以外の陶芸家も手掛けていましたが、それらと見比べても、八木の立体造形は、中空の中身への意識が高いように思われます。

八木のオブジェ焼きは、器物からの展開であり、つまり、ろくろで成形して内側の空洞を作り上げることで形作られる造形です。八木自身、「新しいものと古典との結婚、これが私のねらいです、ピカソやクレーなどの近代絵画としぶい日本のロクロの味を作品の上で、どう調和させるかが私の仕事」と走泥社の結成からまもない頃に語っています。やがて、自身のリアリティを追求するうちに、焼締や黒陶の立体造形が作り出され、膨らみや凹み、口や穴、その周辺で起きるヒダなどの土の表情が、心情、内側、本心、行間などを暗示するようになりました。文学的な作品名も表現の一部になっています。八木は、その後もオブジェ焼きの可能性をどんどん追求し、年々その表現内容や方法は多様多彩になっていきますが、その根底にあったのは、やきものの仕組みを使って、土から様々な表情を引き出し、そこに心情や思想を託したことでした。

（図６）八木一夫「踊り」1962 年
京都国立近代美術館蔵

一方、清水の作品からはデザイン的な思考が見てとれます。土を材料として、塊感、量感、質感、あるいは曲線美など、材料とフォルムの関係が実験的に追求されているように思われます。文様とフォルムの関係もデザインの問題としてとらえられています。また、食器の制作にも関心を寄せ、京焼の味わいと現代の美意識とを融合させた量産の実現についての考えを

（図７）清水九兵衛（洋）「層容」1957 年
東京国立近代美術館蔵

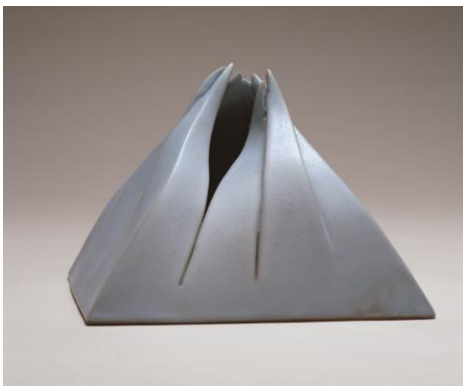
巡らせていたようです。しかしながらデザイン通りにはいかない土との相性に疑問を持つようになり、また、若い頃からの彫刻への思いも断ち難く、1960年代後半には、金属の彫刻でフォルムの追求を行うようになります。1980年、六代六兵衛の逝去で七代目を襲名して再び陶芸に取り組みはじめますが、洋時代の延長線上にある造形を完成度高く実現させています。

（図８）八木一夫「頁１」1971年
岐阜県現代陶芸美術館蔵

◆今、二人の作品から学ぶもの

このように、二人の土とフォルムをめぐる取り組み方は異なります。おそらく、八木にとってフォルムというものは、土の表情に自身の思想や心情を韜晦させていくうちに出来上がっていくものであり、一方の清水は、フォルムを追求するために土をデザインしたのではないかと思われます。

興味深いのは、今、改めて二人の作品を眺めると、前衛陶芸を標榜した八木のオブジェ焼きを通して、むしろ八木が深く理解し、大切にしていたやきもの伝統に触れることができ、むしろ、清水の作品がみせるデザインやフォルムへの関心が、現代の多くの作家に受け継がれているように感じられることです。



（図９）清水九兵衛（七代六兵衛）「花陶容」
1987年　京都市美術館蔵

最後に、本展の展覧会名に使った「陶芸と彫刻のあいだで」という言葉は、現代陶芸の多様化に対し、ルーツを再訪する意味を含め、身近な言葉を選びました。二人の作品が陶芸と彫刻の間隙をついたものでありましたし、実際に、二人は大学で教えるときも、批評の対象になるときも、その合間を行き来しました。

二人が陶芸と彫刻のあいだで挑戦するようになった1950年代の日本は、敗戦からのリスタートのギアも上がって社会が急変する時代です。美術、工芸、デザインなどの造形表現がジャンルを行き交い、いずれの挑戦も言葉で規定しきれないほどの創造の活力に満ちています。それから半世紀以上が経ちますが、立ち戻るたびに再発見があるように思います。

■■作家略歴■■

八木一夫略歴： 1918 7月4日、陶芸家八木一艸（栄二）の長男として京都市東山区馬町に生まれる。／1931 京都市立美術工芸学校彫刻科に入学する。／1937 商工省設置の国立陶磁器試験場の伝習生となる。／1939 大阪歩兵第8聯隊に入隊し、南支広東方面へ派遣されるが、肺を患い帰国し療養する。翌年除隊。／1943 神戸市立中宮小学校の図画工作の教員、立命館第二中学校の助教諭となる。翌年退職。／1946 青年作陶家集団に参加。第2回日展に初入選。／1948 京展

賞受賞。パンリアル展出品。新匠工芸会第 1 回展出品。青年作陶家集団の解散にともない、走泥社結成。第 1 回走泥社展（大阪髙島屋）。／1949 七彩工芸の嘱託となりマネキンをつくる。父子展開催（朝日画廊、京都）。／1950 ニューヨーク近代美術館に作品が陳列される。日本陶芸展（チェルヌスキ美術館、パリ）出品。／1951 ファエンツァ国際陶芸美術館の日本部創設にともない寄贈作品に選ばれる。走泥社東京初個展（和光、銀座）。／1952 現代美術懇談会（ゲンビ）参加。／1954 東京フォルム画廊での個展で「ザムザ氏の散歩」発表。この頃から個展活動が活発になる。／1956 個展（タケミヤ画廊、東京）。／1957 京都市立美術大学彫刻科非常勤講師になる。ミラノトリエンナーレ国際工芸展に出品。／1959 現代日本の陶芸展（東京国立近代美術館）出品。第 2 回オステンド国際陶芸展でグランプリ受賞。／1961 京都・パリ交歓陶芸展出品。／1962 プラハで開催の第 3 回国際陶芸展でグランプリ受賞。／1963　現代日本陶芸の展望展（国立近代美術館京都分館）。工芸における手と機械展（国立近代美術館京都分館）。／1964 現代国際陶芸展に出品。現代日本の工芸に出品。／1965 日本の新しい絵画と彫刻展（ニューヨーク近代美術館）に出品。／1968 現代美術の新世代展（京都、東京国立近代美館）。／1969 作品集刊行。／1970 現代の陶芸―ヨーロッパと日本展（京都、東京国立近代美術館）。／1971 京都市立芸術大学美術学部陶芸科教授就任。／1973 大学のシルクロード調査隊長としてパキスタン、アフガニスタン、イランへ赴く。日本陶磁協会金賞受賞。／1976 工房を宇治市炭山に開窯。／1977 個展（カサハラ画廊、大阪）、創立 30 周年記念第 40 回走泥社展。／1978 個展（伊勢丹、新宿）。／1979 2 月 28 日逝去。

清水九兵衛略歴： 1922 5 月 15 日、塚本家の三男（廣）として名古屋市中区に生まれる。／1942 名古屋高等工業学校を繰り上げ卒業。中部第 6 部隊に入営。／1947 東京美術学校附属工芸技術講習所に入学。1949 年卒業。／1949　東京美術学校工芸科鋳金部に入学。1953 年卒業。／1951 新工芸第 1 回作品展（サヌグサ画廊、銀座）に出品。京都の陶家、清水六兵衛家の養嗣子となる。／1951　ファエンツァ国際陶芸美術館の日本部創設にともない寄贈作品に選ばれる。／1952 六和・六兵衛・洋 作陶三人展（日本橋髙島屋）。日展に初出品する。京展で優賞受賞。／1953 京都工芸繊維大学の実習生として釉薬研究を行う。／1954 日展で北斗賞受賞。／1955 日展で北斗賞受賞。／1956 現代日本陶芸展で朝日新聞社賞第三席松坂屋賞受賞。日展で特選・北斗賞受賞。／1958 東京藝術大学専攻科に入学し彫刻を学ぶ。昭和 32 年度陶磁協会賞受賞。日展で特選。／1959　新工芸協会第 8 回展（和光、銀座）、本展を最後に同会は解散。現代日本の陶芸展（東京国立近代美術館）に出品。／1961 京都・パリ交歓陶芸展に出品。／1962　第 3 回プラハで開催の国際陶芸展でグランプリ受賞。／1963　現代日本陶芸の展望展（国立近代美術館京都分館）。工芸における手と機械展（国立近代美術館京都分館）。京都市立美術大学工芸科陶磁器専攻助教授就任（1968 年教授、1971 年退官）。／1964 現代国際陶芸展に出品。現代日本の工芸に出品。／1966 三浦景生・五東衞展（養清堂画廊、銀座）。色彩と空間展（南画廊、東京）に出品。／1968 個展（南画廊、東京）、彫刻を発表するにあたり、初めて九兵衞を名乗る。以後彫刻家としての個展活動が活発になる。／1969 渡欧（一年半近くローマを中心に滞在）。／1973 戦後日本美術の展開（東京国立近代美術館）に出品。この年から各地での野外彫刻の設置が始まる。／1975 ア

ントワープ国際野外彫刻ビエンナーレ出品。日本現代美術の展望（西武美術館）。第 6 回現代日本彫刻展で毎日新聞社賞、東京国立近代美術館賞受賞。中原悌二郎賞優秀賞受賞。／1976 毎日芸術賞受賞。／1977 彫刻の森美術館大賞受賞。日本芸術大賞受賞。／1979 第 1 回ヘンリー・ムア大賞展で優秀賞受賞。／1980 神戸須磨離宮公園現代彫刻展で大賞受賞。六代六兵衛の逝去により七代六兵衛を襲名する。／1985 吉田五十八受賞　／1987 1960 年代の工芸―昂揚する新しい造形（東京国立近代美術館）。清水六兵衛展（高島屋）。以後、七代六兵衛としても個展活動をする。／1988　京都府文化賞功労賞受賞。／1990 京都市文化功労者。紫綬褒章受章。／1992 清水九兵衛展（三重県立美術館）。／1995 清水九兵衛展（国立国際美術館）。／2000　長男征博が八代六兵衛を襲名する。／2006 7 月 21 日逝去。

■■展覧会関連行事■■

◆講演会

10 月 21 日（土）午後 3 時より

「青年二人がみた新時代の陶芸」諸山正則氏（東京国立近代美術館特任研究員）

当館 B1 階展示室前にて　　観覧料のみ、聴講無料

◆記念トーク　八代清水六兵衛氏（陶芸家、清水九兵衛ご子息）

11 月 11 日（土）午後 3 時より

当館 B1 階展示室前にて　　観覧料のみ、聴講無料

◆記念トーク　八木明氏（陶芸家、八木一夫氏ご子息）

11 月 18 日（土）午後 3 時より

当館 B1 階展示室前にて　　観覧料のみ、聴講無料

◆学芸員によるギャラリートーク

9 月 30 日／10 月 14 日／11 月 25 日　いずれも土曜日午後 2 時より

観覧料のみ、聴講無料

◆ナイト・ミュージアム　コンサート「チェンバロの音は“銀の鈴”」

閉館後の展示室を会場にチェンバロの演奏をお楽しみいただきます。

10 月 14 日（土）午後 7 時より

演奏＝大塚直哉（チェンバロ）

定員＝約 60 名（事前申し込み制）

参加費＝3,000 円（観覧料込み、当日観覧券をお持ちの場合は 2,000 円）

■本展覧会について広報媒体へ掲載、取材をいただく場合、本リリースに紹介されている作品画像をデータでお貸し出しいたします。申込書のご希望の図版に☑を記し、用紙を返信のうえ、お問い合わせください。ご紹介いただく記事、番組内容については、情報確認のため校正の段階で事務局までお知らせください。お貸出しする画像データは本展覧会終了をもって使用期限とさせていただきます。作品の画像を 1 点以上ご掲載の上、本展をご紹介くださる媒体に対し、本展ご招待券を読者プレゼント用に提供いたします。申込書、所定の欄に招待券希望の旨を明記してください。

掲載に関するお問い合わせ先　菊池寛実記念 智美術館（担当：花里、島崎）
TEL.03（5733）5131　　FAX.03（5733）5132　　http://www.musee-tomo.or.jp/

掲載・画像貸出申込書
返信先 FAX：０３－５７３３－５１３２

●貴社基本情報

会社名：	
担当部署：	担当者名：
住所：	
電話	ファックス：
E-MAIL：	

●媒体情報

新聞	媒体名：	
雑誌	発行日：	発売日：
TV	媒体名：	
ラジオ	放送日：	放送時間：
ネット	URL：	

●画像貸出リスト　※キャプションには作者・作品名・制作年・撮影者を必ず入れてください。

希望作品に☑	作品キャプション
□	（図 1）本展チラシ表
□	（図 2）八木一夫　ザムザ氏の散歩　1954 年　高さ 27.5　径 27.0×14.0cm　撮影＝森川昇
□	（図 3）清水九兵衛（洋）花器（オブジェ、目、方容）1955 年　高さ 48.0　径 31.0×34.0cm　東京国立近代美術館蔵
□	（図 4）八木一夫　碑、妃　1962 年　高さ 69.0　径 24.0×8.0cm　京都国立近代美術館蔵　撮影＝小西晴美
□	（図 5）清水九兵衛（洋）花器　1955 年　高さ 15.0　径 27.2×14.5cm　東京国立近代美術館蔵
□	（図 6）八木一夫　踊り　1962 年　高さ 26.0　径 17.5×22.5cm　京都国立近代美術館蔵　撮影＝江崎義一
□	（図 7）清水九兵衛（洋）層容　1957 年　高さ 32.8　径 24.1×23.2cm　東京国立近代美術館蔵　撮影＝藤森武
□	（図 8）八木一夫　頁 1　1971 年　高さ 14.5　径 23.0×23.0cm　岐阜県現代陶芸美術館蔵　撮影＝斎城卓
□	（図 9）清水九兵衛（七代六兵衛）花陶容　1987 年　高さ 18.0　径 25.0×26.5cm　京都市美術館蔵　撮影＝ノマディク工房（内田芳孝）

●読者プレゼント用チケット希望：　□5 組 10 名様　□10 組 20 名様

プレスプレビューのご案内

展覧会の趣旨、作品解説など、内覧会に先立ちましてプレスの皆様にご説明申し上げます。
ご多用のなか恐縮に存じますが、どうぞご出席くださいますようお願い申し上げます。

菊池寛実記念 智美術館

プレスプレビュー　2017 年 9 月 15 日（金）　14:00 ～

14:00 ～14:45　展示室にて、展覧会のご説明、作品解説などを行います。
八木明氏（陶芸家、八木一夫ご子息）、八代清水六兵衛氏（陶芸家、清水九兵衛ご子息）
にもご同席いただく予定です。
展覧会の会場内をご撮影いただけます。

14:45 ～15:00　皆様からのご質問にお答えいたします。

会場： 菊池寛実記念 智美術館　〒105-0001　港区虎ノ門 4-1-35 西久保ビル B1

・日比谷線・神谷町駅出口 4b より徒歩 6 分
・南北線・六本木一丁目駅改札口より徒歩 8 分
・南北線／銀座線・溜池山王駅出口 13 より徒歩 8 分
・銀座線・虎ノ門駅： 出口 3 より徒歩 10 分

ご出席いただける場合は、下記フォームにご記入の上、FAX にて
ご返信下さい。**返信先 FAX　03-5733-5132**

会社名：	
担当部署、氏名	
住所：	
電話：	**FAX：**
Email	